

TOKYO人権

特集 01 いろんな“人間”に
出会えるのが、楽しい! ソニン

特集 02 「^{いのち}生命のメッセージ展」を矯正教育に

vol. **42** | **2009.06**

財団法人 東京都人権啓発センター

特集 01

TOKYO人権

いろんな“人間”に出会えるのが、楽しい!

歌手、タレント、女優としてテレビや映画、舞台で活躍するソニンさん。昨年の夏から今年の春にかけての約7ヶ月間、ミュージカル『ミス・サイゴン』のヒロイン・キムという難しい役を見事に演じ切り、高い評価を受けました。歌や演技だけでなく、その元気で前向きなキャラクターでファンを魅了するソニンさんに、仕事のこと、ご自身のこと、そして、人と人との認めあうことの大切さについて、お話を聞きました。



ソニンさん

なにより素直でいられる 自分を大切にしたい

sonim **Q** 先日、ミュージカル『ミス・サイゴン』の公演を終えられましたね

最初のオーディションが平成18（2006）年11月。稽古の期間も含めて、こんなに一つの作品に長く携わったことはありませんでした。公演が終わった今年の3月まで、足かけ2年半もやっていたことになるけれど、とても楽しかった。楽しかったけど、本当に大変でした（笑）。

『ミス・サイゴン』はベトナム戦争下のお話です。わたしが演じたのは、恋をし、戦禍をくぐりぬけて子どもを育てていく、たくましいキムという名の女性の役でした。アジア圏のミュージカル女優ならだれでも、一度はやってみたいヒロインらしいですよ。でも、わたしには戦争体験はないし、キムへの感情移入が難しく、初めはとまどいました。けれど、愛する人と生き別れて、生まれた子どもにその人の面影を重ねながら生きていく苦しさは、女性として共感できましたし、母親としてのキムを作り上げるときには、わたしも自分の母のことを思い浮かべたりしました。以前に「母親という存在も一人の“女性”なんだ」ということに、気づく機会があったん

です。わたしの母だって最初から“お母さん”だったわけじゃないですよ。

悲劇って、悲しい場面だけが泣けるわけではなくて、ストーリーの中の小さな幸せが悲しさをいっそう際立たせるんです。だからお客さんたちは、序盤の幸せな場面でもう泣けるみたい（笑）。演じるときは、それに負けないパワーが必要でしたし、ロングラン公演だったので、いろんな意味でタフさが求められる舞台でした。

sonim **Q** 歌手としてデビューしたころのことを話してください

わたしの本名が日本語の語感になじまない名前だったら別の芸名になる予定だったらしいです。でも「ソニン」という三文字は響きがいいし、覚えやすいだろうと。それに个性的で良いじゃないかということで、そのままソニンという名前でデビューすることになりました。当時は、『シュリ』という韓国映画が日本でヒットしていた頃で、ちょうど韓流ブームが起こる直前でした。そんな時代の流れも追い風になったのかもしれませんが。幸い、たくさんの方々がわたしを後押ししてくれました。

在日コリアンの多くは“通名”（日本名）を持っていますが、わたしには生まれたときか

らこの名前しかありませんでした。たとえば電話するときでも、いつも本名を名乗ります。相手から「はい？」と聞き返されることも多いのですが（笑）、ずっとこの調子でやってきたので、自分としてはごく普通の感覚でした。

わたしよりも前の世代の方々が差別や偏見で苦労したことは知っていますが、わたし自身はそれほどひどい経験をしたことはなかったと思います。だから、デビューのときも、名前のことを意識することはあまりなかったですね。こうやって、後になってインタビューを受けたりする中で、ようやく自分でも大切なことだったんだと自覚するようになったくらいです。わたしを送り出してくれた人たちの勇気やチャレンジは本当に大変なことだったんだなって、今は思っています。

在日コリアンというのは、すごく微妙な立場だと思っています。生まれてからずっと日本に住んでいるのに、国籍は日本じゃない。もちろん帰化して国籍上は日本人になる人たちもいますが、どちらにしても「在日には居場所が無い」という感覚を、いつも心のどこかに抱えています。すごく中途半端で宙ぶらりんな心境。この感覚を他の人たちに理解してもらうのは難しいかもしれません。だからわたしが本名のままデビューできたことで、家



番組収録の様子
作家の石田衣良さん（左）、アナウンサーの桜井洋子さんと

ハートをつなごう（NHK教育テレビ）
月曜～木曜（随時）午後8時～8時29分
<http://www.nhk.or.jp/heart-net/hearttv/>

族や周囲の人たちは「在日」という一つの“枠”が世の中に認められたような気がして、どこか誇らしかったんじゃないかな。みんながうれしく思ってくれているということは、すごく感じました。

だれでも皆そうだと思いますが、自分らしく生きていくことは簡単なようでいて、意外とむずかしいことですよね。ありのままの素直な自分でいられるような世の中に少しずつでも変わっていくといいなと思います。

出会いの驚きが 人間として生きることの醍醐味

司会をつとめているテレビ番組『ハートをつなごう』では、どんな出会いがありましたか。

『ハートをつなごう』はNHK教育テレビの福祉情報番組です。わたしは平成18（2006）年の番組開始から関わってきました。この番組ではこれまでいろいろなテーマを取り上げました。「発達障害」や「依存症」の問題は、わたしもこの番組でたくさん学びました。

これまでに番組で取り上げた中で特に印象に残っているのは、「性同一性障害」の当事者の方が話していたことです。書類の性別欄に男女の別を記入しなければならないとき、性同一性障害の人たちはそこで一瞬、立ち止まってしまうということ。最近でこそ、戸籍変更が認められるようになったり、性別記入を必要最小限にしようという動きがあるけれど、こうした体験は、国籍の記入欄を前にしたときに在日コリアンが感じるものと通じていると思いました。「世間が決めた枠に納まるべき場所が無い」という立ち位置がとても似ているように感じるんです。性同一性障害と在日コリアンは問題自体は全く別だけれど、お互いに感じていることや悩んでいる部分、周りに伝えたいと思っていることが共通しているので、お話を聞いているうちに、思わず「うんうん、わかる！」って（笑）、力いっぱいうなずいてしまいました。

世の中にはいろいろな事情の人がいるけれど、何かのときに「そういう人がいるって、どこかで聞いたことがあるぞ」と気づくことができる、ちょっとした人助けも自然にできるでしょう。この番組は、そういう“他人を見る目の引き出し”をどんどん増やすことができるので良いですね。

いつも内容が濃いので、収録時間がどうしても長くなってしまいます。たまに、もうろうとすることも…（笑）。でもそれだけ、いつも素敵なものを持って帰ることができるこの仕事は、いまのわたしには“マスト”（must＝必須の意）ですね。これからも気合いを入れて収録にのぞみます！

歌でもお芝居でも、それから舞台でもテレビでも共通するんですけど、表現する仕事って、「自分は何者なんだろう？」っていうことを常に意識せざるを得ないと思うんです。何かを伝えるために自分のことを、より客観的に見つめるっていうか、分析するような感覚ですね。その一方で、たくさんの人たちと一緒に働くわけだから、他者との「価値観の違い」を強く感じる場面にも出くわします。そんな時に、「あの子普通じゃない」とか「変わってる」とかいうことから始まって、「あそこの人たちは…」みたいなことを言うのではなく、「価値観が違って当たり前だ」という前提に、みんなが立てるといいんですよ。

だから、わたしは「他人のことを否定はしない」と心に決めています。わたしの個人的な考えでは賛成できないことも、相手にとっては何か理由があるのかもしれない。いつから、どうしてそう思うようになったのかは、あまり思い出せないけど。でも、『ハートをつなごう』をはじめとした、いろいろなお仕事を通して、いっそう強くそう思うようになった気がします。

仕事で毎日たくさんの方々にお会いします。意気投合して仲良くなることもあれば、「この人とは合わないなあ」と思うこともある。でも、いつも変わらないのは“わたしが想像

もしていなかったような変わった人”との出会いに驚くのがとても楽しいということです（笑）。そういう喜びを感じるのが人間としてこの地球に生きることを意味なんじゃないかな。わたしのブログの『ソニンの人間大好き！』というタイトルには、そういう意味もこめられています。

これからもたくさんの“個性”と出会い、そしてもっともっと、いま以上に“人間であること”を楽しみたいと思っています。

文 山川英次郎



TOKYO人権
ソニンさん
PROFILE

1983年、高知県生まれ。
2000年に音楽ユニットでデビュー。02年にシングルCD「カレーライスの女」でソロデビューを果たす。女優、タレント、ミュージシャンなどとして幅広く活動を展開。現在、NHK教育テレビ『ハートをつなごう』の司会者としてレギュラー出演中。おもな出演作に、TVドラマ『高校教師』、『元カレ』（TBS）、映画『空中庭園』、『蛇にピアス』など。また、04年に『8人の女たち』で舞台デビューを飾り、07年に『スウィーニー・トッド』、08～09年は『ミス・サイゴン』のヒロイン・キム役をつとめるなど、ミュージカルや舞台でも活躍している。2009年10月に、新国立劇場でシェイクスピアの史劇『ヘンリー六世』のジャンヌ・ダルク役を演じる予定。また、2010年1月には映画「ゴールデンスランバー」が公開される。



ソニン 著
？(Question) こそが人生の答え
ソフトバンク・クリエイティブ刊

ブログ

「ソニンの人間大好き！」
<http://ameblo.jp/sonim310/>

information 01 (財) 東京都人権啓発センターの行事案内

「群読」公演 原作 浅田次郎 出演 劇団東京ルネッサンス
脚本・演出 増岡 弘

観客の皆様からご好評をいただき、7回目となる“群読”公演。
今回は短編「鉄道員(ぼっぼや)」 「ラブ・レター」(昼の部)と、長編「天国までの百マイル」(夜の部)の
三作品をアンコール上演いたします。
直木賞作家・浅田次郎の作品世界をどうぞご堪能ください。

2009年7月18日(土)

昼の部 13:00開場 13:30開演～15:30
「鉄道員(ぼっぼや)」 「ラブ・レター」

夜の部 16:30開場 17:00開演～19:00
「天国までの百マイル」

※昼の部と夜の部は別料金になります

一般 2,000円(前売1,500円)

60歳以上 1,500円(前売1,200円)
高校生以下

江戸東京博物館ホール

墨田区横網1-4-1 JR総武線「両国駅」から徒歩3分、
都営地下鉄大江戸線「両国駅」から徒歩1分

お問い合わせ(前売券お求め先)

(財) 東京都人権啓発センター 普及情報課

TEL 03-3876-5372

URL <http://www.tokyo-jinken.or.jp/>

(株) プランニング・ヴィー

TEL 03-3379-8292(午前10:00～午後6:00)

URL <http://www.planning-vie.co.jp/>



作品紹介 鉄道員(ぼっぼや)

閉山となった炭鉱の駅で、春には定年を迎える老駅長。雪の降りしきる夜に駅を訪れた一人の少女と出会う…

information 02

6月は「就職差別解消促進月間」です

就職は、生活の安定や労働を通じた社会参加など、人間が幸せに生きていくうえで基本となるものです。このため、採用選考は応募者の適性と能力に基づき公正に行われなければなりません。この月間を機に、就職差別など企業内における人権問題について考えてみませんか。

お問い合わせ先
東京都 産業労働局 労働環境課
TEL 03-5320-4649

information 03

6月22日は「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」です

ハンセン病の患者であった方々の名誉の回復を図るため、追悼、慰霊及び名誉回復の行事がおこなわれます。

日時 平成21年6月22日(月)
13:00～14:00
会場 都道府県会館
(千代田区平河町2-6-3)

お問い合わせ先
厚生労働省 健康局 疾病対策課
ハンセン病係
TEL 03-5253-1111(内線2369)

information 04

6月23日～29日は「男女共同参画週間」です

男女共同参画週間記念シンポジウム
見つけよう、あなたのベストバランス!—仕事・家庭・地域生活 自分らしく輝くために—

講演
「ワーク・ライフ・バランスを实践しよう」
小崎恭弘(神戸常盤大学短期大学部 准教授)

パネル・ディスカッション
麓 幸子(日経WOMAN編集長)、小崎恭弘(神戸常盤大学)、前田 奨(ミサワホーム(株) 人事グループマネージャー)

日時 平成21年6月25日(木)
18:45～20:45(18:15開場)

会場 東京ウィメンズプラザ ホール
※入場無料、事前申込制

お申し込み・お問い合わせ先
東京ウィメンズプラザ「記念シンポジウム」担当
TEL 03-5467-1980 FAX 03-5467-1977
<http://www.tokyo-womens-plaza.metro.tokyo.jp/>

information 05

東京都人権啓発センター賛助会員募集のご案内

●団体賛助会員 一口 30,000円 ●個人賛助会員 一口 2,000円 (ともに会員期間は4月1日から3月31日までの1年間です)

特典 ・「TOKYO人権」や行事の事前案内などをお送りします。
・「TOKYO人権」やセンターのホームページに団体会員名を掲載いたします。

お問い合わせ先: (財) 東京都人権啓発センター 総務課
電話: 03-3876-5371

団体賛助会員の皆様

(株) 東京交通会館	(社) 板橋区シルバー人材センター	(財) 東京都中小企業振興公社	荏原ユーザライト(株)
東京人権啓発企業連絡会	(財) 東京都弘済会	(学) 高宮学園	(株) プランニング・ヴィー
(有) 東京エイドセンター	東京都住宅供給公社	東京都職員信用組合	(財) 住宅管理協会関東支部
東京M X テレビ	東京都下水道サービス(株)	東京電力(株)	(順不同)

「生命のメッセージ展」を矯正教育に

立ち並ぶ白い人型のオブジェ。その正面に飾られた写真と赤いハートマーク。そして足下に置かれた遺品の靴。平成13(2001)年に東京で始まり、全国各地を巡って開催されている「生命(いのち)のメッセージ展」は、交通事故や犯罪などによって突然失われた命の「証し」を展示するイベントです。

この展示会を刑務所や少年院などの矯正施設で開催する試みが、昨年から始まっています。事故や犯罪の加害者に対して、被害者や家族のメッセージは伝わるのか。また、開催にはどのような意義が見いだせるのか、関係者に取材しました。

息子の死をきっかけに

「生命のメッセージ展」は、これまでに全国50か所以上の会場で、66回にわたって開催されてきました。多くのメディアでも取り上げられていますので、すでにご覧になった方や、ご存知の方も多いのではないでしょうか。

等身大に作られた一つ一つのオブジェ(メッセンジャーと呼ばれます)には、その人の写真とともに、ご家族の手記やさまざまなエピソードを伝えるアイテム、また花や遺品などが飾られています。静かにBGMが流れる空間に身を置いて、メッセンジャーと向き合えば、その命の重みとご家族の思いを強く感じ取ることができるでしょう。

このイベントが始まったきっかけは、ある一人の青年の死でした。

「生命のメッセージ展」の代表を務める鈴木共子さんの息子、零さんは、大学に入学してまもなく、友人と歩いているところを飲酒運転の車にはねられて亡くなりました。夫を病気で失ったあと、母と息子の2人で暮らしてきた鈴木さんにとって、その喪失感、怒り、悲しみはあまりにも大きなものでした。

造形作家として活動する鈴木さんは、失意の中からやがて零さんの死と向き合い、また自らを支えるために創作に打ち込み、息子と友人を追悼する個展を開きます。その個展を訪れた同じ境遇にある人たちとの出会いが、のちにメッセージ展開催の企画へつながっていったのです。回を重ねるごとに参加する遺族は増え、現在では毎回およそ130組が参加するイベントになりました。

メッセージ展を矯正施設で

これまでメッセージ展は、おもに開催地の市民ホール、公共施設、学校施設などを会場として開催されてきましたが、平成20(2008)年3月に川越少年刑務所(埼玉県)でおこなわれた「生命のメッセージ展 in 川越少年刑務所」を皮切りに、今年の1月には市原刑務所(千葉県)で、また2月には多摩少年院(東京都)においてメッセージ展が実施されました。

そもそも被害者家族にとってみれば、矯正施設というのは複雑な思いを抱く対象であるはず。「事件のことを思い出したくない」「加害者の存在を意識すること自体が苦痛」と考える人も少なからずいるでしょう。それでも、加害者が贖罪意識を保持するには、もっと被害者の声と向き合うべきだという主張は、犯罪被害者等の人権に関する意識が高まるにつれて、遺族を中心に大きくなっていました。

一方、矯正施設においても、指導・教育に「被害者の視点」を取り入れる必要性は認識されており、その方法・内容等に関する検討が法務省を中心におこなわれていました。平成13年度には、刑務所などに犯罪被害者家族等を外部講師として招くゲストスピーカー制度を導入。また少年院施設においては「被害者の視点を取り入れた教育」の指導プログラムが始められ、年々、実施する施設が増えてきていました。

こうした、2つのアプローチが一致する場所が慎重に模索された結果として、矯正施設におけるメッセージ展が実現したと言えるでしょう。以前から開催を打診してきたメッセージ展の側からすれば、要望がようやく実現したことになります。

母親の眼差して

矯正施設での開催にあたって、施設側はメッセージ展に参加している被害者家族に対して周到な事前説明をおこない、矯正施設で開催することの意義等についての理解を求めました。その中で、メッセージの展示を希望しない家族は参加しないこと、また、初めてメッセージ展が実現した川越少年刑務所では、希望者のみの見学とし、施設全体でおこなう指導として義務づけることはしないといったことも決められました。※

※川越少年刑務所の場合、希望者283名が5つの班に分かれて、およそ30分間の見学を実施した。この間の経緯は、雑誌『刑政』（2008年12月号）所収「『生命のメッセージ展 in 川越少年刑務所』について」（田中廣司氏）に詳しい。市原刑務所、多摩少年院では入所者全員が見学。

通常のメッセージ展の場合、被害者家族が会場内にいて、見学者と交流することも多いのですが、矯正施設では立ち会いの被害者家族は3組程度とされました。これは、「遺族たちの刺さるような視線の中で見学者がメッセージと対峙しても、本来の命のメッセージが受け止めてもらえない」（鈴木さん）という配慮に基づくものでした。立ち会った被害者家族は、メッセージ展の象徴とも言える赤い毛糸玉を紡ぐための毛糸を見学者に手渡し、「精一杯がんばって」と積極的に声をかけていたそうです。

「生命のメッセージ展の基本的なコンセプトは“母性”だと思っています。もちろん、被害者支援という要素も含まれていますが、生命（いのち）をキーワードにもっと普遍的な、広い意味での共感を得てもらうことが目的です。矯正施設で開催する場合も基本的には同じ。北風と太陽のたとえではありませんが、メッセージを受け止めてもらうためには、母親の眼差して見守ることも必要だと考えました」（鈴木さん）。

見学者の反応は

「会場の雰囲気は厳粛なものでした。涙を流している見学者もいました。通常の指導に増して、より深く心に響く指導が実現できたと思います」。今年2月にメッセージ展が開催された多摩少年院の三村知彦次長は、このように評価しています。

同施設でも「被害者の視点を取り入れた教育」と



「生命のメッセージ展」展示風景

して、被害者や家族の手記などを素材として独自に編集したワークブックによる指導がすでに導入されており、被害者のことを考える機会を積極的に設けてきました。メッセージ展の開催はその延長線上にあるものです。「感受性の高い世代である少年たちが、自分が共感できるメッセージを読みながら、その場にじっとたたずむ姿を見て、実施してよかったと思いました」（三村さん）。

各施設とも見学後の感想文を必須の課題とし、それらはメッセージ展の参加家族へも届けられました。代表の鈴木さんは次のように話しています。

「たとえ課題として書かれたものでも、多くの見学者がメッセージをきちんと受け止めてくれたものと信じたい。少なくとも、自分たちの行為を見つめる一つのきっかけにしてくれれば、開催できた意義は大きいと思います」。

矯正施設における「生命のメッセージ展」の開催は、被害者の声を矯正教育に生かしていく試みとして評価されるだけでなく、シンボルの赤い毛糸が紡がれていくように、人の心と心をつないでいくための、より大きな可能性を感じさせる一歩であったということができるのではないだろうか。

いのち
生命のメッセージ展

次回開催の
お知らせ

**生命のメッセージ展
in 桐生**

2009年8月14日（金）～16日（日）
10:00～17:00

桐生市市民文化会館（群馬県桐生市織姫町2-5）

<http://www.inochi-message.com/sched.html>

リレーTalk

MASAHISA KOGURE



NPO法人
TABLE FOR TWO
International 事務局長
小暮真久さん

TOKYO人権

“ふたりの食卓”という名の 社会貢献活動

“TABLE FOR TWO =ふたりの食卓”という名前の社会起業が注目をあびています。意識すると「二人分の食事」。一つのテーブルを囲み、先進国の参加者と開発途上国の子どもが、時空を超えて一緒に食事をするイメージです。メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）と貧困の問題を同時に解決してしまおうという、革新的な途上国支援活動だといいますが、具体的にはどんな取り組みなのでしょう？

わたしたちがおこなっている活動はとてもシンプルです。社員食堂を持つ企業や団体と提携し、一食につき約730kcalに抑えたヘルシーメニューを作っていただきます。そしてその一食分の収益から20円を寄付していただきます。「20円」という金額は、開発途上国の子どもたちの給食一食分。つまりTABLE FOR TWO（以下、TFT）のメニューを一回食べれば、その人は自動的に途上国の子どもたちに一食分の給食を寄付したことになるわけです。

日本では、カロリーオーバーが原因でたくさんの方が健康を害しています。その一方で、アフリカをはじめとした開発途上国では、貧困による食料問題が深刻です。途上国では食料を確保するため、子どもたちは幼いころから働きに出されます。そのため教育の機会を失い、将来安定した収入が得られる可能性を低めてしまいます。しかし、給食があれば子どもたちが学校に通うことが可能になります。結果として、負の連鎖を断ち切ることができるというわけです。

こうした背景のもと、2007年の春に活動を開始し、同年10月にNPO法人を設立。これまでに企業や官公庁など、合計127団体に参加していただき、100万食分以上の寄付金をアフリカの途上国へ送りました。これは途上国の子ども達約4,700人が一年間に受けられる給食の量に相当します。

「先進国の肥満」と「開発途上国の飢餓」という問題に同時に対処し、双方に健康を手にもらうというのが、TFTのコンセプトです。これまでは、美味しく食べて、同時に社会貢献もできてしまうというような、楽しみながら気軽に参加できる社会活動はあまりなかったのではないのでしょうか。

わたしはもともとコンサルティング会社に勤めていました。そのとき、とある開発途上国を仕事で訪れる機会がありました。すごいハイテク高層ビルのすぐとなりにスラム街。経済でたくさんお金は廻っているのに、それがすべての人には行き渡っていない…そんな状況を目の当たりにして、なんとかならないものだろうかと思いました。

一般企業での仕事は楽しかったけれど、一方で「もっと人に喜ばれる仕事をしたい」とも思っていました。そんなときに出会ったのが、この活動です。自分たちの考えた仕組みで社会を良い方向へ変えていくことができるこの仕事に、わたしはとてもやりがいを感じています。

政治や経済のシステムは完璧ではなく、世界にはさまざまな問題が起こっています。この歪みを正していく政治や経済以外の役割が必要です。いま、これに応えることができるのが「社会起業」だと思います。

しかし、社会貢献活動を第一とするNPOなどの社会起業には「清貧であるべき」という先入観もあり、また、実際にそうであるために活動そのものが片手間になって、めいっぱい取り組むのが難しい場合もあります。しかし、より真剣に取り組むなら、収益をあげることも考えなくてはならないのではないかな。どんなに素晴らしい活動もお金が無くては継続できませんよね。だから、これからの社会起業は、“社会貢献活動をおこなうビジネス”でなくてはいいかなとわたしは思っています。

将来的には食料問題だけでなく、「フォー・ツー」をキーワードに、さまざまなものを地球上のみんなで分かち合い、世界中すべての人が笑顔になれるよう、活動をもっと広げていきたいと思っています。



小暮真久 著
「20円」で世界をつなぐ仕事
日本能率協会マネジメントセンター

※この書籍の購入でも出版社を通じて
20円が寄付されます。

TABLE FOR TWOホームページ
<http://www.tablefor2.org/jp/>

個人で
参加できる
プログラムも
あります！



財団法人東京都人権啓発センター

〒111-0023 東京都台東区橋場一丁目1番6号 東京都人権プラザ内
TEL.03-3876-5372 FAX.03-3874-8346 <http://www.tokyo-jinken.or.jp/>

「TOKYO人権」は都内図書館、区市町村窓口などに配布しています。

「TOKYO人権」ご希望の方へ

「TOKYO人権」は年4回発行しています。ご希望の方は、普及情報課までご連絡ください。